

～卒業論文～

きものという日本文化

高崎経済大学経済学部経営学科

107-387 藤澤 桃美

目次

1. はじめに
2. きものの概要
 - (1) “きもの” について
 - (2) きものに潜む権力
3. 日本人ときもの
 - (1) きものと季節
 - (2) きものと行事
 - (3) きもの時代の心
4. きものへの興味を広げる動き
 - (1) 全日本きもの振興会
 - (2) きもの文化検定
 - (3) きもので街なか闊歩～きものでそぞろ歩き～
 - (4) きもの専門雑誌
5. きものに挑戦
 - (1) きものが着てみたいと思ったら
 - (2) 最初の 1 枚
 - (3) 浴衣を最初の 1 枚と考えている人に
 - (4) 最初の帯
 - (5) きものを着るために最低限必要なもの
 - (6) 最後に
6. 結論
 - 日本人にとってのきもの

1. はじめに

外出先ですれ違うきものをまとった人たち、夏が近づくと店頭に並ぶ様々な浴衣、きもののコーディネート本、いつからだったかはもう思い出せないが、私は昔からこれらを見かけてはついつい足を止めてしまっていた。その時点で、私はもう“きもの”に惹かれていたのだと思うが、まったく自覚はなかった。

そんな私がきものへの興味をはっきりと自覚したのは、成人式の時だった。色とりどりの振袖と、それに合わせて綺麗に結ばれた帯を見てワクワクする気持ちを感じた。そして何よりも、振袖を着ただけであるにもかかわらず、自分が誇らしく思えた。今思えば、自分が誇らしいというよりは「きものはこんなに素敵なのだ」と、きものという文化を持つ日本に感銘を受けていたのかもしれない。その時に私はきものへの気持ちをはっきりと自覚した。

しかしながら、現代の日本において、きものを日常的に着ることはない。正確にいうと、そのような人たちもいるにはいるが、ほんの一握りである。そんな現状に、「きものは日本の民族衣装なのに、なぜ着ている人をあまり見かけないのか」と問う外国の人たちもいる。それをいえば、中国のチャイナ服や韓国のチマ・チョゴリも同じだろうと思うが、確かに特別な時にしかきものに触れることがなくなっているというのは日本人として寂しく感じる。きものという日本文化の素晴らしさにせっかく気付いたのだから、もっと知りたい、もっと着てみたい、もっと身近に、気軽に楽しめるようになれば……、と思う。こうした経緯で、私はきものという日本文化を研究するに至った。

2. きものの概要

(1) “きもの”について

① “きもの”という名称について

“きもの”とは、「着るもの」に由来し、衣服の中で洋服に対して和服を指す言葉である。しかし、きものという言葉ができたのは鎌倉時代から室町時代頃であり、さらに、和服という言葉ができたのは洋服が日本に広まり始めた明治時代だとされている。それでは一体、それ以前はきものをなんと呼んでいたのか。

日本では最初の頃、衣服全般を「衣（ころも）」と呼んでいた。その名称が変わったのは、平安時代中期のことである。奈良時代後期から平安時代にかけて、貴族が着用する「大袖」と庶民が着用する「小袖」とに、衣服の二分化が起きたためである。二分化の理由やその

過程は後述するとして、明治時代に入り、大袖が洋服にとってかわられたことで、最終的に残ったのは小袖の方であった。この小袖が一般的な着るものとして認識されるようになり、そうして小袖＝着るもの＝きものとなった訳である。

大袖の消滅により区別が不要になったことで小袖ではなくきものの名称が優先されたためか、現在ではきものと呼ばれることがほとんどである。小袖ときものを同等視する認識が長きに渡って続いていたため、和服の名称として今なお小袖と呼ばれることもある。

②きもの特徴

きものは一見して洋服とは違う形をしている。きものの最大の特徴は、その仕立てにある。型紙を見れば一目瞭然だが、きものは洋服のような曲線ではなく、直線で裁断され、直線で縫われている。太身と細身で寸法の差があるとしても反物から裁断する方法は同じである。それゆえ、色・柄・模様の違いはあるが、きものの完成形はすべて同じ形になる。何種類もの形のバリエーションがあるわけではないというのが洋服と決定的に異なる点である。

きもののこの形、そして直線裁ち・直線縫い仕立ての特徴が生まれたことには、実は、日本の風土が起因している。日本の夏季は湿度が高く、体温が発散しにくいという問題がある。そのため、袖は大きめに開かれており、脇の下には風通しが作られ、前は合わせて帯で締めるだけという形になった。また、素材は風通しの良い麻だったのだが、これを仕立てるための縫い糸が貴重だったため、なるべく簡単な仕立て法が考えられた。それが直線縫いだったというわけである。

③現代におけるきものの立場

日本の衣服の主流が洋服となった今、きもの市場は年々縮小している。そんな中で、きもの業界はきものという日本文化の生き残りを賭け、様々な戦略を講じているが課題は多い。

第一に、「量より質」の戦略がある。需要が減退している現在、見込み生産から受注生産に切り替える業者が多いが、受注がなければやっていけない。また、職人の高齢化や後継者の不在により転廃業を余儀なくされている工場や機屋も多い。生産基盤が弱体化している中で、果たして「量より質」は本当に適切なのか。

第二に、「新規顧客の開拓」を課題とする戦略がある。成人式にしろ、結婚式にしろ、その人口は減少している上に、きものはそう何回もの着用機会がないものである。今日ではレンタルが普及しているため、多くがそちらに流れるのも頷ける話だ。さらに、結婚式に至ってはジミ婚やリゾート結婚式の台頭で着用シーンが奪われているのも痛手である。そうするとやはり成人式の振袖が突破口と考えられるが、これが難しい。競争が激しい上に、重ね売り¹によって、かえって、きものが敬遠されることもあるからだ。しかしながら、この戦略はどんなに困難であろうとも、継続しなければますますきもの市場が縮小してしま

うことは確実である。

第三に、「ファッション性を重視」する戦略がある。今の日本では、きものは高くて手間がかかる、そんなイメージがあるのは周知の事実である。しかし、浴衣に関しては人気がある。それは、買いやすい価格と気軽に着ることができるという、洋服に通ずるものがあるからだ。そのようなヒントを見逃さず、ファッションニーズに応じていくというこの戦略はなかなかの良策だが、それが簡単にいくなれば今まで苦労はしていない。ユニクロや H & M、FOREVER21 などファストファッションが注目、人気を集める中で、そう安易に上手くいくなどと確信はできない。

だが、日本文化としての評価はそう悪いものではない。日本人にとっては一種の郷愁であり、やはり離れがたく、失いたくないものである。休日におしゃれ着として着る人も多くはないが存在するし、何より海外の親日家には「kimono」として人気があり、もてはやされる存在でもある。世界でも認められたと思うと少し素晴らしく思えてこないだろうか。

(2)きものに潜む権力

昔、きものというものは単なる衣服ではなく、現代のきものにはない、“権力”にまつわる役割を秘めていた。これに関連するのが、後述するとした衣服の二分化の理由と変化の過程である。

それまで衣と呼ばれていた衣服が、大袖と小袖に二分化したのは奈良時代後期から平安時代であることはすでに述べたが、その理由は「公家と庶民を区別するため」であった。当初、小袖は庶民の表着でもあったが、「白小袖」とも呼ばれる貴族の下着でもあった。ちなみに、小袖は現在の洋服のような筒型の袖口があるものであり、大袖は衣冠束帯²の「衣冠」に当たるものである。

衣服の二分化の兆候は、飛鳥時代～奈良時代における、活動量による衣服の変化にすでにみられる。支配階級である高位の人々は活動する必要がないため、手足の隠れる動きにくい衣服を身に纏うことで労働する意思がないことを示していた。つまり、庶民に対して身分を視覚的にも表し、自分たちと庶民は異なるという意識を植え付ける一種の洗脳行為を行っていたといえる。

鎌倉時代から室町時代になると、小袖を着用する庶民の中から武家が現れた。権力を持った武家の人々は大袖を着用するようになったが、身体的な力という面では明らかに武家の方が公家よりも勝っており、大袖による武家に対する公家の衣服による洗脳行為は成り立たなくなっていた。しかし、武家が大袖を身に付けるのはフォーマルな場に限定されており、日常的に着用するのは専ら小袖であったため、公家との区別はそれほど問題ではなかった。問題だったのは小袖を着用する庶民間での視覚的な身分の区別である。これをどうにか行いたいと考えた武家は、「動きにくさ＝階級の高さ」の概念を持ち出し、この時点ではまだ筒型であった袖に、40cm ほどの袂をつけた。これが袂のついた現在のきものの原型となる。そうすることで動きにくくして、階級の高さを感ぜさせる衣服へと変えてみせ

た。これはある意味、「成り上がり」を表す衣服とも見ることができる。

室町時代、同じく庶民の中から頭角を現した町人だが、彼らの強さは金銭面にあったため、力の強さを誇示する必要はなかった。それゆえ、町人たちは大袖を着用することはなかったが、その代わりに素材（庶民は麻、町人は絹）で差別化をはかった。

しかし、この時代の後期には公家も日常着として小袖を着用するようになり、彼らは洋服が入ってくるまで、衣服による権力の顕示を行えなかったと考えられる。

3.日本人ときもの

(1)きものと季節

日本には四季がある。それに合わせて春物、夏物、秋物、冬物の洋服を入れ替える「衣替え」を私たちは行っている。当然きものにも夏物と冬物があり、その風習は、きものを着用していた時代にも存在した。元々は、平安時代の宮中において、中国にならって始められた行事であり、旧暦の4月1日と10月1日に冬装束と夏装束を入れ替えていた。そこには、災厄を祓うという意味も含まれていたという。この風習は、江戸時代の武家社会にも受け継がれ、冬に綿入れ³、春秋に袷⁴、夏に単衣⁵、盛夏に帷子⁶というように、季節ごとに定められた日を境に、人々は一斉に衣替えをしていた。着用するそれらのきものから、春・秋・冬物の時期（5～10月）を「袷の時期」、夏物の時期（6～9月）を「単衣の時期⁷」と呼ぶ。ちなみに、きもの下に着る襦袢にもきものと同様、袷仕立てのものと単衣仕立てのものがあり、衣替えを行う。それに応じて半衿も付け替える。そしてこの風習はやがて一般庶民にも広まり、明治以降も引き続き行われた。現代において、学校や官庁などの制服の衣替えが6月と10月なのは、この名残りである。

この時期のルールは、今日でも、きものを着る場合には無視してはならない。季節に合ったものを選び、6月からは単衣のきもの、10月からは袷のきものを着るのが一般的である。さらに、同じ単衣でも、6月と9月には縮緬・紬などを、盛夏にあたる7月と8月には絹・紗などの薄物を、と着分けることが常識となっている。

また、四季を有する日本ならではの美意識で、女性のきものには季節の花など自然の風物を描いた模様のもが多い。素材だけでなく、模様についても季節に合わせて選ぶことを心掛けるのが、きものを着る上での常識である。

(2)きものと行事

きものには種類がある。それによって格が異なり、着ていく場が決まっている。また、年間を通して行事にも様々なものがあり、その時々にあった装いが求められる。特に、きものにおけるマナーは洋服のそれよりも周囲のチェックが厳しいので、より注意が必要で

ある。代表的なきものの種類とその特徴を知り、主要な行事やその他きものを着る場面にふさわしい装いができるようにしておきたい。

***留袖**

留袖には黒留袖と色留袖がある。

黒留袖は既婚者の正礼装である。黒地のきもので、裾の部分と、上前の襟下（この部分を褙という）から後ろ身頃にかけての部分に豪華な模様が施されていることから、江戸褙、裾模様とも呼ばれる。染め抜き日向五つ紋を付け、下襲⁸をすることが決まりだが、最近は省略して比翼仕立て⁹にしてあることが多い。結婚式では主に、新郎新婦の母親や仲人、親族が着用する。

色留袖とは、地色が黒以外の裾模様の留袖である。下襲や比翼仕立てをせず、三つ紋もしくは一つ紋を付けた色留袖は準礼装として着用できる。既婚者、未婚者関係なく着用できるが、既婚者の準礼装としてはもっとも品格のある装いになる。ただし、染め抜き日向五つ紋を付け、下襲もしくは比翼仕立てをしたものは黒留袖と同格とみなされ、正礼装の着物として扱われる。五つ紋の色留袖は正礼装の装いのため、格の高い柄のものがほとんどである。宮中では黒が禁色であることから、色留袖を用いる。また気の張ったパーティー、国際的な行事、結婚式で近親者でない人が出席する場合などには色留袖を着用し、小物は白で統一する。裾模様であることや落ち着いた色目のものが多いため、控えめな印象を与える。訪問着では少々大げさに感じる場面に役立つきもので、結婚式、披露宴、パーティー、お茶会などに着用できる。

***振袖**

振袖は未婚者の正礼装である。袖の長さもくるぶしまであり、格調高い絵羽模様¹⁰のきものである。本来は黒地のものを黒振袖、黒以外の地のものを色振袖という。また、染め抜き日向五つ紋で下襲をつけたものが正式とされる。振袖は結婚式や披露宴での花嫁の衣装として正式な儀式で着用されていたが、最近では仕立て面でも下襲でなく、比翼仕立てにしてあるものが多い。現在ではそれらの目的で振袖を誂える人も少ない。

また、下襲や比翼をつけた仕立てをしていない振袖は準礼装とされる。この場合、一つ紋を付けるが、振袖に限っては染め抜き紋だけでなく、振袖の雰囲気合った縫い紋や加賀紋なども用いられる。最近では、振袖の紋の有無は重要視されず、省略することも多い。振袖には袖の長さによって大振袖、中振袖、小振袖があるが、最近では小振袖はほとんど見かけなくなった。

***訪問着**

訪問着は、既婚者、未婚者関係なく着用できる準礼装である。結婚式、表彰式、パーティー、お茶会、お見合いなどで幅広く役に立つ。振袖と同様、絵羽模様のきものである。

準礼装の訪問着として、三つ紋か一つ紋を付けるが、一つ紋の方が着用の範囲が広がる。

*色無地

色無地は、訪問着と同じく既婚者、未婚者関係なく着用できる準礼装・略礼装である。白生地を1色で染めた無地のきもので、地味な色なら法要の席にも使える。準礼装なら染め抜き日向三つ紋を、略礼装なら染め抜き日向に限らず、一つ紋を付ける。茶席に欠かさないきものである。

*付け下げ

付け下げは、肩山¹¹に向かって上向きになるように模様付けされている、小紋よりは格が高く、訪問着よりは気軽なきものである。訪問着との違いはその柄付けにあるが、最近では仕立て上がると訪問着と区別のつかないものもある。しかし、値段は訪問着より安価なので人気がある。略礼装として一つ紋を付けるが、付けない場合でも略礼装として扱われる。

*小紋

小紋は、洋服でいえばプリント柄のワンピースにあたるきものである。手描きのものもあるが、一般的には型染めの総柄が主流である。柄の大小、量、色数などは好みだが、セミフォーマルに着たいならば柄の少ないものが良い。帯合わせによりカジュアルにもよそゆきにもなる便利なきものである。

*織りのきもの

ものでいえば、木綿や紬、御召などのきものことである。木綿は普段着、紬や御召は柄ゆきによって少し改まった席にも着ていくことができる。後染めの訪問着¹²などはパーティーなどにも使える。

行事とふさわしい装い

行事	きもの
年始の挨拶	無地一つ紋・訪問着（紋の有無は問わず）
初釜	無地一つ紋・訪問着（紋の有無は問わず）
茶事	無地一つ紋・色無地・付け下げ・小紋
卒業式	三つ紋・一つ紋・訪問着・付け下げ
謝恩会	一つ紋・訪問着・付け下げ・振袖
入学式	三つ紋・一つ紋・訪問着・付け下げ
十三参り	一つ紋・訪問着・付け下げ
宮参り	一つ紋・訪問着・付け下げ

茶道のお稽古	小紋・織りのきもの（木綿・紬）
七夕	織りのきもの（木綿・麻）・浴衣
八朔の挨拶	一つ紋・訪問着（紋の有無は問わず）
法事	一つ紋
七五三	三つ紋・一つ紋・訪問着・付け下げ
歳暮の挨拶	付け下げ・小紋
結婚式	黒留袖・色留袖・三つ紋・一つ紋・訪問着・振袖
お葬式	黒五つ紋・

(3)きもの時代の心

きものを日常的に着ていた時代には、1枚のきものを長く着るために人々は様々な工夫をしていた。たとえば、成長期の子どものきものを成人になるまで着続けるための肩上げや腰上げである。肩上げとは、きものを肩のところで縫い上げて、桁丈を実際の肩幅や腕の長さに合わせて調整することで、腰上げとは、きものの丈を子どもの身長に合わせるために、腰のところで折り返して縫いつけることである。

また、日常の立ち振る舞いにおいて、最も力がかかり傷みやすいお尻の部分を補強するために、単衣のきものや浴衣に付ける居敷き当て（尻当てともいう）は、消耗品である衣服の寿命を延ばすための工夫である。それでも色褪せたり、黄ばんだりすることは消耗品である以上避けられない。

しかし、その段階ではまだ処分せず、染め直しを行う。染め直しは、反物にした後に元の色を抜いて、白生地に戻してから別の色に染め直す手法である。このリフォームを行うことで、違う色のきものが欲しくなった場合でも、古いきものを捨てずに済む上、新しいものを買わずに済む。これは、1枚1枚のきものを無駄にしない工夫であったといえる。

そして、その工夫は着終わった後にも続く。友禅や紬など、良いものなら親から子へ、普段着なら姉・兄から妹・弟へ譲渡され、譲る相手がいなければ布団や座布団・綿入れ、最終的には雑巾にまでリメイクして徹底的に活用される。

きもの時代を生きた人々は、物を無駄にしない心、1つのものを大切にする心を持っていた。新しいきものをそう簡単に買えなかった庶民にとって、リサイクルは暮らしの知恵であると同時に、1枚のきものとともに流れる時間を自身の元に留める豊かな行為でもあった。

4.きものへの興味を広める動き

きものという日本文化を継承するための支援は調っている。たとえば、もし、「きものを自分で着ることができるようになりたい」と思っているとする。その際、探せば日本全国でいくらでも着付け教室を見つけることができるはずだ。きものに触れ、楽しみ、継承し

ていきたいという意思を持つ人がいるなら、その人に対する支援はされ得るし、その人はいち継承者と成り得る。

しかし、少し考えてみてほしい。前述した例は、すでにきものに興味を持っているという前提が必要である。つまり、支援を活用できる状態、すなわち、きものに興味がある、という状態にするための動きは果たしてあるのかということである。きものを日本の重要な文化として後世に残すために、きものへの興味を広げる動きがあるのかどうかを調べた。それらを以下に述べる。

(1) 社団法人全日本きもの振興会

① 概要

社団法人全日本きもの振興会（以下、きもの振興会）とは、きものに関する知識の普及を通じて、民族衣装に対する国民の再認識ときもの文化の向上を図ることを目的とした組織である。原糸メーカー、織物生産者、卸売商、小売商、染色加工、履物、和裁士、着付け師等のきものに関係する業界の総意により昭和 41 年に発足し、昭和 44 年 2 月に、通商産業省（現経済産業省）によって公益法人に認可された。

② 役割

きもの振興会では、きものは日本の四季に順応するよう、先人が永年にわたって智慧と経験を積み重ね改良してきた衣服であり、日本人らしい美しさや優雅さを最大限に表現する衣服であると考えている。また、美術的な価値も高く、先人のたゆまぬ努力によって磨きあげられた文化遺産であるとも考えており、きものを次世代へと継承していくことこそ、きもの振興会の役割であるとしている。また、きものに携わる人がきもの振興への使命や主体的に取り組む決意を、『きもの憲章』として制定し、業界の倫理規範を訴えている。

きもの憲章

1. 私たちは、日本の伝統文化の基本である「きもの文化」の継承と、新たな発展につとめます。
2. 私たちは、きものを買う人に信頼され、着る人に満足されるよう、誠実で公正な仕事につとめます。
3. 私たちは、「きもの文化」、「きもの産業」のために、自ら努力するとともに、互いに信頼し、協力しあうようつとめます。

（平成 14 年 5 月 30 日制定）

③ 事業内容

このきもの振興会の主な事業内容は、教育事業と和文化推進事業の大きく分けて二つである。教育事業としては、和装着装初級・中級・上級認定制度による高等教育、きもの学

による大学および一般市民教育、きものコンサルタント認定制度による専門教育を行っている。和文化推進事業としては、七五三参りや十三参りの啓蒙普及活動、きものの日の制定・提唱、全日本きものの女王コンテストの開催などを行っている。これらの詳細は後述する。

また、インターネットホームページによる会の活動紹介や、「きものネット」および「きものネットマンスリー」など会報の公開、一般紙や業界紙、きもの専門誌による広報活動も行っている。その他、きものお助け相談室・夢ふくらむきものスローガン「きもので乾杯！国際人」の発表や、「きもの愛好家大賞」表彰制度の実施（平成 3 年から実施）、消費者センター情報提供事業として、一般消費者を対象とした和装絹製品に関する知識および情報などのビデオカセットの提供もしている。

教育事業

*和装着装初級・中級・上級認定制度

継続的なきもの教育と「資格の得られる着装教育の実施」という高等学校からの要望により、財団法人全国高等学校家庭科教育振興会の後援を得て、高等学校に対する「和服着装認定制度（初級～上級）」を実施している。指定のカリキュラム（6 回程度の講義と実技、筆記による試験）に基づく和服着装認定条件を満たした学校で、所定の成績を得た生徒に対し、社団法人全日本きもの振興会より「学校教育和服着装」の合格証の交付を行っている。初級は自分できものを着て名古屋帯を結べること、中級は自分で礼装が着こなせることと人にきものを着付けて名古屋帯を結べること、上級は人に礼装を着付け袋帯で変り結びが出来ることを条件とする。

元々は、昭和 52 年から学校教育法に基づき設置された、全国の高等学校および短期大学を対象とする実技指導教育がその始まりである。家庭科教育の場を通じた簡易和装縫製・着装等を内容とした教育であり、昭和 56 年から平成 5 年の間には着装教育に加えて「型紙によるきものの製作講習」を実施した。また、昭和 56 年には全国高等学校長協会家庭部会が行う「技術検定 2 級試験」に「型紙によるきものの製作手法」が認められ、その後、技術検定受験者が大幅に増加する大きな成果を上げた。きものの学校教育を展開して以来、これまでの間に着装教育や製作講習や各種の教材等の提供を通じて、約 20 万人以上の先生や生徒が参加している。

*きもの学

「きもの学」は、きものの視点から日本の文化、生活、経済という様々な世界を見つめなおしていこうとするものである。日本の歴史と風土の中で磨かれてきた、きものの衣装としての変遷と、伝統的な形態の中に表現される美の追求、そして、多様で清新な染織文様、色彩、技術の創造力、また、それらを生み出す職人や工芸家の生の姿は、日本文化の本質ともいえる多彩な価値の集積である。研究者、染織作家、伝統芸能、流通など、各方面の

専門分野で活躍する講師陣を迎え、それらに触れてもらうことで、きものという文化に興味を与え、多面的に学んでもらうことを目的としている。

この講座は元々、社団法人全日本きもの振興会に寄附されたきもの学を、京都学園大学が2002年に科目として開設したものである。現在は、京都学園大学がさらに財団法人大学コンソーシアム京都に提供し、これに加盟する大学の学生および一般市民にも「きもの学・京都」として受講の案内を行っている。また、2007年からは「きもの学・東京」として早稲田大学でも開講されている。こちらは基本的に早稲田大学に所属する学生しか受講できないが、2010年度は講座の3回ほどが一般市民にも公開講座として開かれた。

***きものコンサルタント認定制度**

きものコンサルタントの資格を設け、試験を実施している。きものコンサルタント資格試験は日本の伝統の衣服であるきものについての知識や着装の技能、および指導者としての能力を認定する資格制度である。きものコンサルタント試験は予備講座の受講後に筆記試験と実技試験が行われる。

和文化推進事業

***きものの日の制定・提唱**

きもの振興会は、昭和41年に会が結成されて以来、11月15日を「きものの日」に制定、提唱してきた。昭和39年の東京オリンピックにおいて、東京を訪れた世界各国の人々から、「きものは日本の民族衣裳だと思っていたが、きもの姿をほとんど見かけないのはなぜ」との声を受けて、会のシンボルとなる日を制定したのが始まりである。

ちなみに、七五三の日に家族そろって着物で出かけてほしいとの願いから11月15日に決まった。この日とは別に、全国呉服小売組合総連合会により5月29日が「呉服の日」に制定されている。

きものの日を中心に、七五三参りやきものの女王コンテスト、和装学校による無料着付け体験のイベントなど、きものに因んだ企画や行事が、毎年全国各地で展開されてきている。きもの振興会としては、今後もきものの日を広く提唱し、日本の伝統衣裳としてのきものが、大勢の人々に親しまれ普及発展することに力を注ぐ意向であるとしている。

***全日本きものの女王コンテスト**

昭和41年に会が設立されて以降、毎年「全日本きものの女王コンテスト」を開催している。これまでで36回を数えるこの種のコンテストでは草分けとも言える。

北は北海道から南は九州まで全国を地域ブロックに分けて地区大会を開催し、容姿、教養、人柄の点から、真のきものの女王にふさわしく、きもの文化の普及のために奉仕できる人を選出する。選出された地区女王により全国大会を開催し「全日本きものの女王」が選ばれる。

女王に選ばれると、きもの・ゆかた展示発表会や隅田川きもの園遊会、日本橋まつり、七夕ゆかたまつり、きものショー、その他 TV 雑誌等の取材などのイベントにきもの振興の手伝いとして出演できる。

(2)きもの文化検定

経済産業省・農林水産省・文化庁後援の「きもの文化検定」は、きものを学ぶことを通してきもの文化への理解を深め、もっときものに親しんでもらうことを目的とした検定である。合格者には「合格認定証」が発行され、学歴・年齢・性別・国籍を問わず受験が可能である。受験地は北海道、宮城、群馬、東京、石川、静岡、愛知、京都、大阪、岡山、広島、島根、香川、福岡、鹿児島、沖縄で、意外と広範囲で開催されている。

この検定は 5 級から 1 級まであり、難度は 5 級より順次級が下がるごとに上がる。表 1 によると、合格率は 5・4 級では 88.7%、初級なので妥当といえるだろう。3 級では 57.7% で約 30%下がるが、それでも半数は合格する計算である。しかし、2 級になると不合格者数が合格者数を上回り、合格率は 5 割を割っている。さらに 1 級では不合格者数が合格者の約 30 倍という結果が見られ、合格率はなんと 3.3%にまで下がる。きものを着用しなくなったことで、基礎知識すらままならない人も多い世の中ではあるが、改めてきものは奥が深いのだと感じさせられる結果である。自国の文化に関する知識であるはずが、現代人にとっては異文化について問われているようなものなのかもしれない。これを第 1 の結果とする。

次に、図 1 によると、年齢別では 10 代から 80 代まで幅広く受験しているが、各級で平均して受験者数が多いのは 30～50 代、10 代が受験するのはほぼ 5・4 級であると分かる。また、難度が上がるにつれて 20 代と 30 代の受験者が減少し、逆に 50 代と 60 代の受験者が増加する傾向にある。40 代と 70 代に関しては、各級における受験者数はほぼ横這いである。これを第 2 の結果とする。

表 2 からは、職業別による試験結果を知ることができる。学生、社会人、主婦、着付け関係者、和装業界関係者などが受験しており、5・4 級で多いのはやはり学生である。全体的に受験者数が多いのは社会人と主婦で、1 級においても着付け関係者や和装業界関係者が社会人・主婦層を上回らず、それほど受験していないというのは意外な結果だった。合格者数においても、普段きものに触れる機会が多い着付け関係者と和装業界関係者が決定的に有利であるとの結果は見られなかった。これを第 3 の結果とする。

また、図 2 からは、女性に比べて圧倒的に少ないが、男性も受験していることが見てとれた。これを第 4 の結果とする。

以上の結果から次の三つのことをいいたい。まず第 1 の結果から、数少ない 3.3%の合格者たちには、ぜひ、その貴重な知識を広めていってもらいたいということである。次に第 2、第 3 の結果から、幅広い年齢・職業層にこの検定は普及しており、きものへの興味は大々的ではないにしろ、広まっているのではないかということである。最後に第 4 の結果から、

男性のきもの人口を増やすことが課題に挙げられるということだ。華やかさと艶やかさという点で、きものはどうしても女性ものが注目されてしまう。しかし、きちんと着こなされた男性のきもの姿には趣がある。世の男性の目を、「粋」な着こなしに向けさせるにはどうすべきかが新たな問題である。

表 1 級別合格者数

	合格	不合格	受験者数	合格率
5・4 級	1,638	208	1,846	88.7%
3 級	813	597	1,410	57.7%
2 級	510	835	1,345	37.9%
1 級	36	1,052	1,088	3.3%

表 2 職業別合格者数

	5・4 級			3 級			2 級			1 級		
職業	合格	不合格	受験者数	合格	不合格	受験者数	合格	不合格	受験者数	合格	不合格	受験者数
学生	333	125	458	73	42	115	11	12	23	1	4	5
社会人	400	13	413	266	153	419	186	265	451	9	390	399
主婦	485	36	521	259	196	455	112	219	331	10	217	227
着付け関係者	220	22	242	104	95	199	71	127	198	6	165	171
和装業界関係者	100	2	102	57	56	113	79	120	199	6	177	183
その他	108	10	118	54	55	109	51	92	143	4	99	103
合計	1,646	208	1,854	813	597	1,410	510	835	1,345	36	1,052	1,088

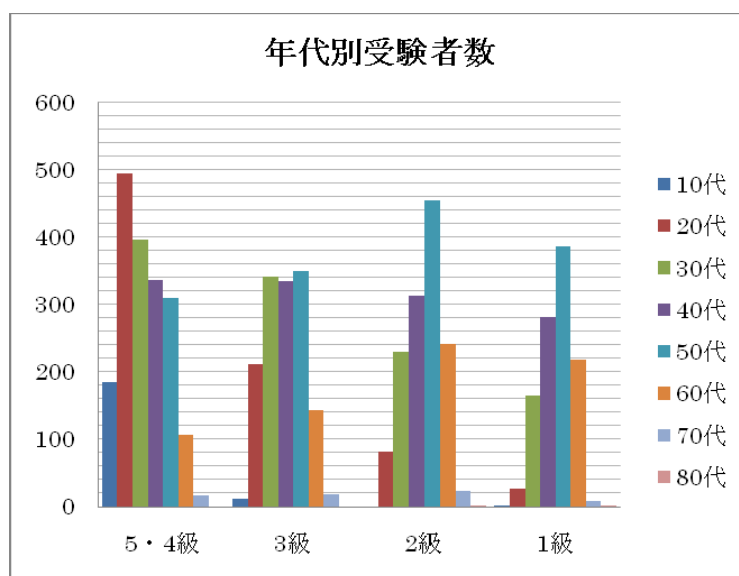


図 1 年代別受験者数

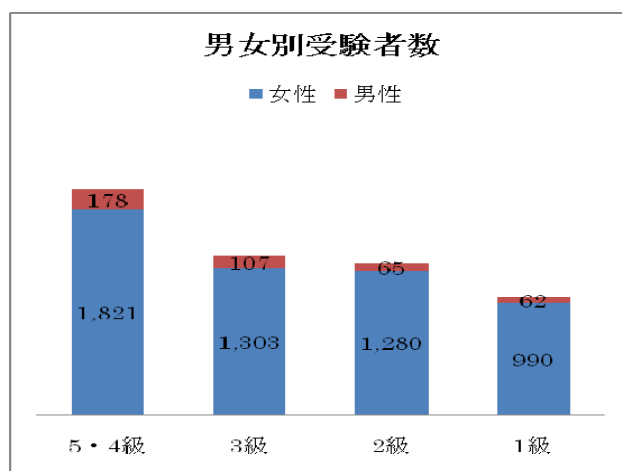


図 2 男女別受験者数

※表 1、表 2、図 1、図 2 は『きもの文化検定 公式サイト 受験データ』に公開されている 2009 年 10 月 18 日実施の試験結果の数値により作成したものである。

(3)きもので街なか闊歩～きものでそぞろ歩き～

「きもので街なか闊歩」は、NPO 法人桐生産地乃店（代表：小林宏光）主催の、きものを着て街中を散策しようというイベントである。群馬県桐生市で毎月第 1 土曜日に開催されており、今までに計 700 人以上が参加している。着付け料込み 2,000 円できもの一式（きもの、帯、帯締め、帯揚げ、長襦袢、草履、ただし足袋は持参）を貸してもらえるので、気軽にきものを楽しむことができる。借りるきものは、寄付によって集まった 2000 点以上の桐生の名品「お召し」「銘仙」などで、常時 200 点ほどの中から選べる。随時入れ替えをしているのでたくさんの着物を楽しむことができる。また、着付けだけの希望（料金は 1,000 円）はもちろん、自分のきものを自身で着付けてイベントに参加することも可能である。

桐生市は奈良時代から絹織物の名産地として知られ、桐生織と呼ばれる高級織物は京都・西陣と並び称されていた。その歴史の古さ、文化財の多さ、特徴などから「東の小京都」と呼ばれている。織物のほかに染色、刺繍、縫製などの技術も桐生市では発達しており、桐生御召・羽二重・人絹帯地・絹綿交織などが有名である。そういうわけで、本来は桐生市における地域活性化のためのイベントであるようだが、確実にきものを広めるためにも一役買ってくれる、一石二鳥なイベントである。

(4)きもの専門雑誌

今日、様々なファッション雑誌が出版されており、洋服における流行のファッションが発信されている。それと同様に、きものの着こなしや帯の特集などを掲載した専門雑誌が

出版され、きもの文化の発信を行っている。定期的に発行されているのは以下の 4 冊である。これらについての詳細データをまとめたものを表 3 に示す。

①『美しいキモノ』

カタログ的な情報だけではなく、きものを中心とした和のライフスタイルや美容、旅の提案、日本の伝統文化の紹介をする。昭和 28 年創刊で、2003 年には通刊 200 号を迎えた。

②『きもの Salon』

初心者、お洒落の工夫が楽しくなってきた人、お肌や体型の変わり目にいる人など、様々な読者のきもの選び、帯選びに関する悩みに徹底的に答える。きものにまつわる幅広い情報を提供している。

③『季刊きもの』

ビジネス、カルチャー、ファッションのテーマ別、そして経営トップから新人社員まで、また大手から家業店までと、多様な立場とニーズに応える幅広い内容を掲載している。創刊以来、きものビジネス唯一の全国専門誌として川上から川中・川下までカバーし、物づくりから小売業までの情報発信に抜群の力を発揮する。

④『七緒』

ふだんの着物の楽しみ方を提案する、まったく新しい着物の雑誌を目指している。気軽に袖を通したくなるようなコーディネートを軸に、手入れの悩み、着付けの知恵、下着の裏技、価格の問題など、着物の本音を取りあげる。

上記以外に、単発での発行ならば、数え切れないほどにあると考えられる。たとえば、夏の浴衣を特集したものや成人式の振袖を特集したものなどは毎年発行されるし、上記 4 冊の別冊、またはファッション雑誌や他の専門雑誌の別冊として発行される場合もある。

しかし、これらのきもの専門雑誌がファッション雑誌のように幅広く世間で読まれているかという点、そうではない。表 3 の発行部数と表 4 を比較するとその差は一目瞭然で、『美しいキモノ』の 11 万部に対して『Can Cam』は 71.5 万部と 6.5 倍も多く発行されていることが分かる。それらすべてが人の手に渡ると考えるならば、きもの専門雑誌を読む人は、ファッション雑誌を読む人の 6 分の 1 以下ということになる。洋服人口に比べてきもの人口が圧倒的に少ないということが実感できる結果である。

表 3 きもの専門雑誌の詳細データ

	出版社	発行間隔	発売日	定価	発行部数
『美しいキモノ』	アシェット婦人画報社	季刊	2,5,8,11 月の 20 日	1,850 円	11 万部

『きもの Salon』	世界文化社	年 2 回	2,8 月の 20 日	1,950 円	非公開
『季刊きもの』	織研新聞社	季刊	2,5,8,11 月の 30 日	1,500 円	非公開
『七緒』	プレジデント社	年 4 回	3,6,9,12 月の 7 日	1,400 円	約 4.6 万部

表 4 主なファッション雑誌の発行部数

	発行部数
『JJ』	約 36.5 万部
『Can Cam』	71.5 万部
『Ray』	約 24.5 万部
『non-no』	約 44 万部
『with』	約 59 万部
『Zipper』	約 22 万部

※表 3、表 4 は雑誌のオンライン書店、世界文化社 SEKAIBUNKASHA.COM、社団法人日本雑誌協会、ファッション雑誌ヘッドラインにおいて 2010 年 12 月時点で公開されている数値に基づき作成したものである。

5.きものに挑戦

(1)きものが着てみたいと思ったら

きものを着ないで、きものと親しくなるのは無理である。「きものを着てみたい」という気持ちが起こったら、とにかく着てみる。テニスがラケットを持たないことには始まらないのと同じように、きものを着ないと、きものライフは始まらない。

しかし、着てみたいと思っても、人目を引くきものに躊躇する人も少なくない。きものは高級なもの、特別なもの、という認識が強く、着ていると「どうしてきものなの?」「今日は何かあるの?」などと聞かれるのが目に見えているので、着るのをためらってしまう。しかし、そこで着続けることができれば、この人はきものの人だと理解されるようになり、逆に洋服の日に「今日はきものじゃないの?」と聞かれるようになったりすることもある。それまで気長に構え、自由にマイペースできものを楽しむことのコツである。

(2)最初の 1 枚

きものを着てみるには、きものがなければならない。レンタルするという手もあるが、きものに親しもうとするならば自分のきものがあることが不可欠になる。もし親のものがあれば譲ってもらおうと良いが、なければ買うことになる。しかし、大半の人が最初の 1 枚

は何を買うべきなのかという問題に直面する。

最初の 1 枚は何を買うべきかについては、ありとあらゆるきもの入門書やエッセイで触れられているが、その中で「色無地は便利」というオススめにはひっかからないようにしたい。お茶をやっている人にとって、色無地は制服のようなもので、どうしても必要になる。しかし、普通の人が手にするのはずっと後で良い。なぜなら、色無地や留袖、訪問着、振袖などというものは、成人式や結婚式、法事、お茶事等の正式な席用の、いわばフォーマルドレスのようなものであるからだ。洋服をコーディネートして新たにワードローブを揃えようとする時、フォーマルドレスから揃える人はまずいない。呉服屋さんが「1 枚は持っておかないと」と言うものではあるが、それは「いつかは 1 枚」と頭の中で変換するようにしておく。

話を戻すと、下記の変換表を利用して、今自分は何が着たいかということを考えることがスタートである。そうして考えると、最初の 1 枚のきものならば、大抵の人は、遊びに出かけたり楽しんだりするための普段着＝小紋以下があてはまることになる。

きものから現在の衣服への変換表

きもの	現在の衣服
黒留袖（江戸袷）	ウエディングドレス・ローブデコルテ ¹³
色留袖	ローブデコルテ
振袖・訪問着	パーティードレス
付下げ	カクテルドレス
小紋	アフタヌーンドレス・スーツ・ワンピース
紬	カジュアルな洋服
現代のファッションきもの	流行の洋服

とは言うものの、大雑把に小紋以下のきものといっても結局どんなものを買ったら良いか分からない、という初心者におすすめするのは地味めの小紋である。それも、友禅や縮緬など、1 度着たら覚えられてしまうようなものではないものが良い。たとえば、チェックや、昔ながらの江戸小紋っぽいけれど江戸小紋ほど渋すぎないものなどだ。変換表でいえば、アフタヌーンドレスやワンピースにあたるものである。

カジュアルな洋服にあたるならば、紬の方が着やすいのでは、と考える人もいるだろうが、最初に紬をおすすめしない理由はいたって簡単である。「紬は高い」からである。紬はピンからキリまであるが、安い紬は安っぽいのが実状であり、買うとすれば高価なものになってしまう。しかし、その割に結局はカジュアルにしか着ることができない（結婚式にも紬で出席する人はいるが、それはちゃんとした信念や知識、着こなし、キャリアがあるからこそ認められること）。最初の 1 枚で紬を選び、どこに行くにもそれだけになってしまうと、周囲からはそれしか持っていないと思われてしまう。それは避けたいことである。

次に、色に関しては、過度に派手なものは避ける。真っ赤やまっピンクは可愛いと思っても選ばないようにする。着物はあつという間に似合わなくなるものであり、同時に決して安くはないものだ。それを買うのだから、なるべく長持ちするよう考慮すべきである。また、実のところ、若い人ほど濃い緑や茶、紺、黒といった地味な色が似合うのであり、年をとったらむしろちょっと明るめの色を、とされる。そうはいっても、基本的には自分が洋服で 1 番馴染んでいて、似合うことに自信のある色にするのが 1 番である。洋服の場合、自分はこうだから……と念頭におくと選びやすい。

結論として、最初の 1 枚は、自分が普段着ている洋服のジャンルからそれほど極端に遠すぎないものが良い、ということを挙げる。色も、生地も、素材も、お値段も、そうやって選ぶことで、自分に合ったナチュラルな着こなしができる。

(3) 浴衣を最初の 1 枚に考えている人に

やはり普通のきものはまだ敷居が高い、と感じるならば、浴衣を選ぶのも手である。浴衣は、年齢性別を問わず気楽に着ることができる、一番気軽なきものである。それゆえ、実際に大半の人が最初の 1 枚に浴衣を選ぶことが多い。

そんな人たちにここで提案するのは、浴衣ではなく木綿のきものを購入するということだ。木綿のきものは、1 枚なら浴衣として着ることができ、長襦袢を入れれば単衣の時期(6~9 月、厳密には 6 月と 9 月)になっても、きものとして着ることができるからである。浴衣として着るなら抵抗感はないが、きものとして着るとなるとちょっと……という人は、無地に近いくらい細かい柄、もしくは無地の縮のような、透けていないやや厚地の浴衣などを選ぶと良い。まずは浴衣として着て、馴染んできたら秋には長襦袢を入れて着る。そうするだけで、随分と着やすく感じられるようになる。そうして、きものとして着ることへの抵抗がなくなったと感じたら、前述のおすすめ、地味めの小紋へステップアップする頃合いだ。また、紬ものも可、プレタ¹⁴でも良い。いまどきのプレタは相当良くなっており、市松柄や可愛い花柄、モダン柄などの中々素敵なのが 8,500 円くらいで買えたりするので、浴衣の次のきものにぴったりである。

(4) 最初の帯

きものの最初の 1 枚が決まったら、次は帯選びに入りたい。当然ながら、きもの初心者はどう頑張ってもお太鼓はそう簡単には結べない。きもの初心者の最大のネックは着付けよりも帯結びにある。そこですすめるのが半幅帯だ。帯枕¹⁵も要らないので背中が楽であるし、最近の半幅帯は長さもきちんとあって、可愛いようにも、華やかなようにも、いろんな結び方を楽しむことができる。その他、半幅帯には適当に結んでも、それなりの形になるという利点ある。極端に言えば、「長くなったからはさんでしまえ」でも「右と左で長さが違う…」でも全然問題ない。半幅帯は初心者の味方、初心者のためにあるような帯であるといえる。

また、余裕があればもう 1 本購入したい。ちょっとしたお出かけ用の小紋に合わせる正絹のものやおしゃれな刺繍の入ったものを購入しておく、歌舞伎座などに着ていくこともできるようになる。もし最初の 1 枚が浴衣なら、浴衣帯を買う時に夏夏しすぎたものではなく、オールシーズンを通して締められるものを買っておくと良い。

初心者向けとしては他に、作り帯が挙げられる。帯結びが苦手な人や体力が衰えてきた年嵩の人にも利用されるこれは、お太鼓の部分がすでに出来上がっていて、前になる部分を巻いて、後ろにお太鼓を差し込むだけになっているとても便利な帯である。

(5)きものを着るために最低限必要なもの

きものと帯が決まれば、後は、着付けに必要な細々としたものを揃える。最低限用意しておきたいのは以下のものである。

- ・きもの用下着
- ・長襦袢
- ・衿芯
- ・コーリンベルト
- ・腰紐（初心者は 2〜3 本必要）
- ・伊達締め
- ・帯板
- ・足袋
- ・履きもの

半幅帯の場合、帯揚げや帯留、帯枕は特に必要としない。しかし、帯揚げや帯留は半幅帯の時に飾りとして使っても問題ではないので、使いたい人は用意すると良い。

(6)最後に

着付けに必要なものが揃ったら、後は着るだけである。前述したように、着付け教室は探せば簡単に見つかるので、着付けを習いに行くのも良い。また、同様に、着付け入門書も本屋さんに足を運べば必ず見つかるので、それらを参考にして着付けを独学しても良いだろう。大切なのは「きものを着たい」という気持ちと、習得できるまで継続することだ。そして、自分で着付けられるようになったら、どんどんきものを着て、楽しいきものライフを送ってもらいたいものだ。

6.結論

日本人にとってのきもの

日本人にとってきものはどんな存在か。それは時代によって移り変わってきたように思う。始まりは、日本の風土と付き合っていく上でのパートナーのようなものだ。どこまで自身を守れるか、そして、いかに快適に過ごせるかがきものにかかっていたから、試行錯誤を重ね、現代にまで残るきものの原型を生みだしたのだろう。また、ある時は、身分社会における自身の価値を視覚的に表して、洗脳を行ったり自分の立場を認識させたりするバロメーターのような役割を持つものになり、今では自分という個性を表すための手段となった。形や名称、存在の意義は変化しつつも現代まで受け継がれてきた。だからこそ、これが世界に出ると、日本文化を表現する手段として成り立つのである。

だが、惜しいことに、きもの自体が各時代の文化を吸収し、受け継がれてきたのだとしても、それを身に付ける私たちがそこに宿るものを受け継いではない。現代の人々の着物離れがそれを明示している。きもの時代の人たちは 1 枚のきものを本当に大事にし、衣服としてともに歩めなくなっても、最終的には雑巾として使い、その 1 枚と寄り添い、心豊かに生きていた。しかし、現代の日本人はきものに対して「高い・手間がかかる」と理由を付ける。けれど気軽な浴衣は何の抵抗もなく手に取る。大事にしようという意思が初めからなく、簡単で気軽で安い、使い捨てのものの便利さにばかり目を向けているように感じられる。目先のことばかりに気を取られているといっても良い。きものは大事に手入れをすれば、孫の代まで着ることができる。また、きものにも流行はあるが洋服のように変化は速くなく、普遍的な伝統色や模様が必ず使われているため、時代の流れに惑わされない安定感を持っている。今、高くても孫の代まで着ることができたら洋服とどちらが経済的といえるだろうか。来年、再来年、流行遅れと気にすることがなくなるならば、毎年増える洋服の対処に悩まずに済むのではないだろうか。そうやって長い目で見れば、きものの方がずっと経済的で、気軽な衣服であると分かる。

季節に関しても同様だ。衣替えの風習は残っていても、夏にブーツを履いたり、冬に籠バックを持ったり、果たして季節を気にしているのか分からない人が多い。また、野菜や果物、魚などの旬がいつなのか、昔は常識だったことが分からなくなったことから、せっかくの四季を楽しむ心を見失い始めていることがうかがえる。

四季がある日本の風土が生んだきものという日本文化を、今一度見直すべきだ。着てみなければ分からないきものの素晴らしさを、マイナスのイメージだけで敬遠して経験せずに一生を終えることは、日本人としてあまりにもったいないことである。まずは一度きものを楽しんで着てもらいたい。そしてプラスのイメージを少しでも持ってもらえたならば、それは、きものという日本文化の継承を担う 1 人になったということになるのではないかと考える。

注

¹ 以前、きものを購入したことがある人に、その後も購入を勧めること。また、購入してもらうこと。

-
- 2 衣冠…冠、袍、単衣、指貫、平緒、魚袋、襪、沓、太刀、笏 束帯…冠、袍、半臂、下襲、裃、単衣、表袴、大口袴、石帯、平緒、魚袋、襪、沓、太刀、笏 衣冠は束帯に代わる朝廷に出仕する際の着用する公服（朝服）。束帯は朝服だったが、後に礼服になった。
- 3 表布と裏布の間に綿を入れたきものこと。
- 4 胴裏・八掛と呼ばれる色布を裏地に付けて仕立てたきものこと。
- 5 裏地を付けずに仕立てた表地だけのきものこと。
- 6 盛夏に着る、生絹や麻で仕立てた単衣のきものを指す。
- 7 正確には単衣の時期（6、9月）と盛夏の時期（7、8月）に分かれる。
- 8 きものと同じ形のきものを下にもう1枚着ること。
- 9 衿、袖、振り、裾に別布を付けて2枚着ているように見せる仕立てのこと。
- 10 縫い目で模様が途切れないような模様付けのこと。
- 11 肩の1番高い部分、前身頃と後身頃の折り目の山のこと。
- 12 織りの白生地模様を染めたもの。
- 13 ネックラインが深く大きくカットされ、首元や胸元を露わにしたスタイルのドレス。イブニングドレスの1つ。
- 14 プレタきもの。従来、割高感のあった裏地・仕立て代のコスト削減のため、一般的に適応しやすい寸法で仕立て上げ、すぐに着用できるようにされているきものこと。
- 15 女性の帯のお太鼓がくずれないように、お太鼓の中に入れて形を整えるもの。「しよいあげ（背負揚げ）」ともいう。帯は江戸時代に装飾化し、幅広で丈が長くなったため、帯を持ち上げて形よく結ぶのに用いるようになった。大小さまざまな大きさがあり、お太鼓を大きくふっくらと結ぶか、小さくまとめるかで帯枕の大きさを決める。一般的に厚くて大きな帯枕でお太鼓をふっくらと作るのは、留袖や二重太鼓、または若い人向きとされ、薄くて小さな帯枕は普段着や年配の人向きとされる。

参考文献

橋本澄子編（2005）『図説着物の歴史』河出書房社

文学ファッション研究会（2005）『むかしのおしゃれ事典』青春出版社

中島梓（2006）『着物中毒』ソフトバンククリエイティブ

きくちいま（2003）『ふだん着物のたのしみ方』河出書房新社

泉二宏明（2007）『きものまるわかり BOOK』淡交社

日本繊維新聞社編集局（2005）『繊維 20 世紀の記録（繊維ファッション年鑑 2000 年版）』

日本新聞社

安倍美和子編（2010）『めしませ着物 着付けから簡単お直しまで』日本放送出版協会

龍村謙（1966）『日本のきもの』中央公論社

参考 URL

<http://www.kanaiya.co.jp/mame/index.htm> 着物の豆知識講座

<http://www.ocn.zaq.ne.jp/mgf/puleta.html> 松井呉服店

http://aik1.com/kimono_navi/ 着物の知識なび

<http://www.geocities.jp/kiryutekutekukimono/> 着物でそぞろ歩き

<http://www.fujisan.co.jp/index.asp?link=header> Fujisan.co.jp 雑誌のオンライン書店
<http://www.sekaibunka.com/index.html> 世界文化社 SEKAIBUNKASHA.COM
http://www.j-magazine.or.jp/data_001/index.html 社団法人日本雑誌協会
<http://www.nightscape.info/fhl/> ファッション雑誌ヘッドライン
<http://www.kimono-net.or.jp/index.html> きもの生活文化情報サイトきものネット
<http://www.kimono-kentei.com/> きもの文化検定公式サイト
<http://www.aoyamakimono.com/guide/step.html> 青山きもの学院
<http://www.naraigoto-net.jp/index.html> 習い事の窓口
<http://www.tisen.jp/tisenwiki/?%C8%EF%C9%FE%B4%D8%CF%A2> 知泉 wiki
http://www.tafs.or.jp/kimono%20queen_select2010.html 東京織物卸商業組合